「動く植物、動かない動物」

佐藤・島野・久保・東城・藤山・山本研究室（生物系）

植物は育ちはじめると動かない。でも種子や花粉は風にのって旅をします。「種子は動物だ‥」北大の東正剛さんの 20 年前の言葉です。

一方、動物の多くは活発に動きます。ただじっとして餌を待ったり、擬態やさなぎ、休眠や死んだふりなど「静」を使って生き延びます。

行動学の立場からみると動物と植物はさほど違いはなく、ただゆったり動く植物が多く、メリハリのきいた動きをするのが動物であるといえるかも知れません。試験中の学生さんはじっと席に座ってますが、頭のなかの血流はすばやく流れているようです。異なる時空間や生物レベル（異なる視点）から身近な生き物をながめなおしてみましょう。

めざせ、信州大学「多様な自然知創生館」
～信州からの宝物～
「自然情報集積館？知の創造館？」

佐藤利幸・山本雅道・二宮　晏・伊藤建夫（理学部）

中部山岳は日本列島の気候や春夏秋冬の気象を左右し、日本の生物多様性を創生維持してきました。信州はその中央部に位置し、南アルプスには日本でただ１地域にしかないヒメヤナギラン・ヒイラギデンダがあります。また北アルプス周辺は北方要素（多雪）・南方要素・大陸要素の植物が集います。そこには蝶が舞いツキノワグマが散策します。

この信州の自然の恵みを世に示したのが、半世紀以上にわたって蓄積された「長野県植物誌」であり、そのもとになった「信州大学植物標本：ＳＨＩＮ」の存在です。またライチョウの剥製などの動物標本なのです。長野県（信州）の山道は奥深く緻密にいりこみ人間と自然が悠久の

共存を維持してきたのでしょう。地球環境保全を憂慮する時代がやっときました。日本の自然環境保全を語る場合に信州の自然環境遺産を語らずしては不可能です。日本の絶滅危惧植物の約半数が信州の山岳や山里に点在しているのです。自然環境税が認められれば、信州は潤うでしょうね・・（文責　佐藤）